

和田干藏

---

陸奥大間崎に於ける兩棲類の分布

---

青森博物研究会時報 第一卷 第一號別刷

昭和九年八月

# 陸奥大間崎に於ける兩棲類の分布

青森縣師範學校博物教室

和田 干 藏

大間は北緯四十一度三十一分の本州最北端商港地であるが、動物地理學上北海道との關係を調ぶるに重要な地帯である、或動物の北限分布を決める場合には是非一度同地を踏査する必要があることは何時でも考へてゐたが、交通が不便な爲出かけるのを見合はして居りました處、今回大間小學校長盛壽氏の御厚意によつて六月二十二日から三日間同地に滞在し、附近動物相を親しく調査することが出来ましたので、多年の宿望としてゐた兩棲類の分布狀況はよく判つたのであります。

同地は要塞地帯になつてゐる爲地形の撮影、寫生、解説等は一切禁じられてゐる關係上、今回は單に調査事項の一部である兩棲類の記事をのせて、御援助を賜りました盛校長竝に地元有志諸彦に對し感謝の意を表し度いのであります。

今回の實地調査の方法とその成績を申上ますと、先づ材料の蒐集方は盛校長に御任せ致しましたら、私の行く數日前から職員、兒童乃至使丁に至る迄同地産動物捕集の動員を發し、尙分布比較研究資料として採集區域を更に同地より南方の奥戸、材木乃至原田、矢越方面に迄延長し、捕へたものは全部大間小學校に蒐めて飼育してゐました、その他以前から捕られた鳥獸魚介や外の色々な動物は標本となつて保藏されてゐたので、私はそれら材料に就て着々調査研究を進めましたが、只物足らなかつたのは大間に行く途中赤川村でモリアナガヘルの雄一疋を發見したから、これは大間にも當然分布してゐるものと思ふてゐたのに、蒐集材料の内にはなかつたので不思議の餘り盛校長にそのことを御話致しましたら、翌二十三日（二日目）には又職員、兒童を動員して猛烈な發掘作業をやらしました結果、辛うじて青蛙四疋を發見致しましたが、これは豫期以外のシュレーゲルアマガヘルでありました、そこで今回大間附近で調査した兩棲類を整理してみるに次表の様になります。

標準和名	分布區域 (×…分布 △…稀)										備考		
	北海道	大間	奥戸	材木	原田	赤川	本州	四國	九州	琉球		臺灣	朝鮮
ヒキガヘル		△	△	△	△	△	×						大間最北限
ニホンアマガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	分布濃厚
ヤマアカガヘル	×	×	×	×	×	×	×	×	×				同上
エゾアカガヘル	×	×	×	×	×	△	△					×	本州に分布すること確實
シユレーゲルアヲガヘル		×	×	×	×	×	×	×	×				大間最北限
モリアヲガヘル						△	×	△	△				赤川北限
カジカガヘル			×	×	×	△	×	×					原田川最北限
アカハラキモリ		×	×	×	×	×	×	×	×				大間最北限
ハコネサンセウウチ			×	×	×	△	×						原田川最北限

上表によつてみると北海道に共通なものはニホンアマガヘル、ヤマアカガヘル、エゾアカガヘルの三種で、大間を最北限にしてゐるのはヒキガヘル、シユレーゲルアヲガヘル、アカハラキモリの三種である、又赤川村迄北進し大間迄來てゐないものはモリアヲガヘルで、カジカガヘルとハコネサンセウウチは佐井の原田川を最北限としてゐるこゝが判りました。同時に北海道には居ないが津輕地方に澤山居るトノサマガヘル、ツチガヘル、トウネクサンセウウチ、ニツカウサンセウウチ等は今回大間附近で見附からなかつたが、これ等のものが下北半島のどの邊迄分布してゐるかは是非調査して見度いのである、或は最近大間小學校で發見してゐるかも知れません。

今回の調査で新に發見されたのはエゾアカガヘル、シユレーゲルアヲガヘルモリアヲガヘルの分布状況である、エゾアカガヘルは從來北海道以北に居て本州にゐないと思はれてゐたのは大間地方に澤山ゐるこゝが判つた、モリアヲガヘルは從來恐山を最北限と思はれてゐたが、昨年大畑營林署管内の森林で發見され今回は更に北方の赤川村で發見されたから先づこゝは最北限になる、尙シユレーゲルアヲガヘルは大湊附近で採取したことがあるが大間地方に澤山居ること

は全く豫期以外のことでした、この青蛙は元來熱帶系のものであるのに、この北緯四十一度三十一分の所迄北上して、而も青森市附近と等しい大群棲をしてゐることは、同蛙分布上世界的最北限と誇り得ると同時に、これを天然記念物として永久に棲息地域を保存する必要があると思ひます。

之を要するに大間地方には南北兩系統の兩棲類が相混棲してゐるのが特徴であるが、津輕海峽が出来る前に移動したものは北海道と共通な種類で、海峽が出来た後に北進したものはこの大間で旅行を喰止められたものと認めることは出来る、又その途中原田、赤川迄進んで來てるものは將來には必ず大間迄行くものと考えられるのであるから、大間は本州動物分布の關所であるを謂ふことが出来ます。大間迄進んで來たが海峽があるために同地で北限を示してゐるものには上記兩棲類の外に哺乳類のサル、カモシカ、クマ、リス、ホンシウヒミズモグラ、ムサビ(バンドリ)、キツネ、タヌキ(又ムジナ)、エチゴウサギ、~~ツグミ(マテ)~~、ヤマネ(キノコダマ)、鳥類のホクロクキジ、ヤマドリ、ハシブトガラス、ジフイチ(燈臺に突死することあり)、エナガ、チゴモズ、ヤマセミ等や、淡水産のドチャウ、ナマヅ、サハガニ等もあるし、昆虫類ではカナブン、シヤウジャウトンボ、シホガラトンボ、モノサシトンボ、エンマコホロギ、カブトムシ、ヒグラシ、カラスアゲハ(クロアゲハ)、海産ではトビウラ、アミモンガラ、~~ヌ~~コブネ、アカガヒ、イガグリガヒ等一寸指折つても澤山の種類があがつて參ります。この様に本州最北端である大間地方は詳しく調査する程、學界に未如なものばかり多く出てくるのであるから、この際吾々青森博物研究會員は及ぶ限りこの研究にかゝりますが、地元大間の同好諸氏も從來通り御奮闘し本會と聯絡をとつて調査を續けたならば、必ず同地帯動物分布の狀況がよく判つて學界に貢獻する點は多大なものと信じて居ます。

昭和九年七月十九日稿